ラスト・ミッシェル

えっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラスト・ミッシェル

【Ｎコード】
Ｎ２１３０Ｑ

【作者名】
えっくす

【あらすじ】
三年前、このアラビア風の世界に召喚された女子大生、ミッシェルこと三井依琉。
頭の良さを買われ、異例の早さで娼館の下っ端から宰相へと大出世を果たしてしまったとさ。
「好きな奴に女だってばれたぁ？」
だけど、そんな安穏な生活も、もうおさらばしたいのよ。分かる？
なんちゃってラブコメ、ちょっぴり異世界召喚ファンタジー。

1．予想不可能なこと。

さて。どうしましょう。人生最大のピンチが訪れちゃいました。

長い戦争の果て、ブロツワル国王の死でけろっと終わってしまい、早二年。

どこの馬の骨かもわからない私の計算力を買われ宰相となってしまって、同じく二年。

前国王とは違って将来有望の国王には素性がばれてしまっても、もう一人の宰相だけにはばれずに隠し通し続けてまたもや二年。

だけど、たった二年しかたっていない安穏なレスト歴も、もうおさらばしたい。

そうすれば私がやるはずだった仕事がもう一人の宰相に回る。そして理系の私でさえ唸った数字の羅列に苦しむがいい。

そうだ、これだ。

私は決心して、着慣れた男用のローブを羽織った。ついでに机の上にばらまかれた書類を全部払い除けた。みっちりと書かれた膨大な紙が目の前で踊る。ざまあみろ、と内心ほくそ笑む。これらの書類を全部拾うのはあいつだろう。これがせめての悪あがき。私の最後のプレゼントと思っていただこう。

「くそやろう」

吐き捨てて、大事な書類の上を歩く。

悔しい。悔しくてたまらない。

でも、それ以上に……。

私はたいして多くもない荷物を持って、王宮を去った。

私、ミッシェルこと三井依琉（みついえる）は計算をすることを楽しいと思えるような、そんな日本人。決して美人とか、そんなことはない。かといって不細工かと聞かれればＹＥＳとも言い難い。ただ運動がダメなのっぽさんと説明するのが一番簡単だ。

そんな私が突然この世界にきてしまったのは、おそらく友人のせい。あれほど泳ぐのは駄目だと言ったのに、飛び込み用の海に突き飛ばされて、気がつけばこの世界にきてしまったのだ。

この世界は、見るものすべてが古風だった。

石が並べてある街道ではラクダと馬が人を乗せてゆったりと歩いているし、建物自体も真四角の窓が開いた白いものだった。砂塵が混じる風に吹かれ、ここはアラビアの世界なのか？　と疑ったものだ。

幸いにも、私はその場に居合わせた娼館の女将さんに助けられ、あれよあれよと言う間に遊郭に連れてこられ、娼館の下っ端となっていた。

女将さんは、珍しい（らしい）私の髪を見て「しめた！」とか思っていたのらしいけれど、見知らぬ場所で華やかな衣装や飾りをつけられて大泣きしてしまった私に、たいそう同情してしまい、下っ端として働かせてくれたのだ。

最初は見慣れぬ場所で不安でたまらなかった。まだ大学生になりたてだったし、昼夜問わず甘い声がどこかしら漏れてくることに怯えていたのだ。

――――それが三年前のこと。

私がこの世界に来てしまったときは、ちょうど戦争の真っ只中だった。

運がよかったのやら、女将さんが構えていた娼館は戦火に見舞われることはなかった。戦を始めた国とは正反対に位置していたからだ。この時、普段は遊郭として邪険な目で見られたこの世界は、一時期だけだが、貴族たちの避難地として大勢の金持ちがなだれ込んできた。もちろん、一般の人や旅人も必然的に流れつき、付近の遊郭は本来の仕事はさることながら昼間は酒場のように賑わっていた。下っ端の私は寝る暇もなかったのだ。

流れついた旅人は、戦争の状況を詳しく教えてくれた。

戦争の原因は国境にあるオアシス。もともとは旅人の喉を潤すためのオアシスで、世界条約なんたら機関（長ったらしい名前で私は全く覚えていない）というものが定めたものらしく、どこの国のものでもなかったらしい。それが憎らしいことに我が国の馬鹿な王さまが勝手に自分のものだと発言したため、世界条約なんたら機関と、その国境のオアシスに面する隣国が怒ってしまい、この様である。こんな目に逢っていい迷惑だ、なんて言ったら旅人は「むしろこの方が良かったのかもしれない」と言っていた。

「ブロツワル現国王は無能だ。さっさと隣国の手に落ちれば良いのだ」

私は目から鱗が落ちる思いでいた。ここには王さまを罵っていいという法律があるのか？

旅人は周りを気にする風もなく、臆さず言い切ってしまった。

「一庶民の私なんかが予言するまでもない、この国はお終いさ。さあ祝おうではないか、娼妓よ、酒を。さあさ、未成年も祝うべきだ。ミッシェルもこちらにおいで。新しい国の前祝いに一杯やろう」

旅人の凛々しい声に惹かれて遊女はもちろん、お客さんまでもが釣られた。なんとも罰当たりな発言だな、と思いつつ私は慣れないお酒をちびちびと飲んだ。

だが実際罰当たりになったのは国王だった。結局オアシスは世界条約なんたら機関のもとに返され、ブロツワルの膨大な領地は半分近くまで減り、ブロツワル国王は死刑にされた。

天罰てき面である。

さて、私が宰相という地位に出世したのは、まあなんというか、成り行きだろう。前ブロツワル国王が亡き今、隣国による不当な政策者などの人員削減（いわゆるリストラみたいなものだ）により、ブロツワル国の政治は貧相なものになった。なんといっても人手が足りなかったのである。優秀な者が王宮におらず、幸か不幸か、国を纏め上げる力を持たなかった隣国・アブリートはブロツワルの領地を捨てた。

植民地になるのは避けられたブロツワル国だが、窮地にあるのは変わりない。そこで前国王の嫡子であるユリアヌス様が有志と優秀な者を募られた。

そして当時一人しかいなかった宰相、ステンカ＝ラクスエスが、私の働く辺鄙な地の娼館までやってきたのだった。

「ミッシェル、ステンカ様からお話があるそうだよ」

金を数え会計を済ました直後だった。店のバーと廊下を隔てる暖簾から顔を出したのは、女将さんだった。

「ステンカ様？」

誰だ？

お得意様の中にはそんな名前の人はいない。だからといって一見さんに「様」をつけることもない。

金貨を握ったまま聞き返すと、「宰相殿さ」と答えられた。幾分か失礼だが、は？　と口中をあっぴろげにしてしまった。

宰相殿？　宰相って、この世界じゃ王さまの次に偉いんじゃなかった？　なんでまた、その宰相がうちの店に？

石の如く固まってしまった私を尻目に、暖簾を押し避けて一人の男が入ってきた。

その男は、まず、「根暗」だったのである。長い前髪に隠れている上に、さらにローブで顔を覆い隠しているため（砂塵から守るためなので仕方ないことなのだが）、表情が全くと言っていいほど見えない。おまけに眼鏡（なんとこの世界、古風な癖してしっかりとした眼鏡はあるのだ）はビン底より厚そうで、眼は点のように小さくなって不格好である。

まあ、ようするに第一印象はよろしくなかったのである。

だが、日本人の血を受けている私だ。遠慮なく「ダサッ」と指をさして笑うわけもいかず（ただ単に勇気がなかっただけだが）、苦笑い程度に留めた。

「ええと、何でしょうか？」

とりあえず話が先だと思い口火を切ったのだが、女将さんが「待

ちな」と宰相殿の左腕を掴んだ。

「アンタ、常套くらい脱いだらどうだい？」

宰相相手にとる態度ではないはずなのだが、女将さんは呆れ調子でそう呟いて、宰相殿はひどく緩慢な動作で常套を脱いだ。男は２０代だと予測できた。左耳だけにつけられた、卵よりは小さい楕円型のイヤリングは、微かにのぞく瞳の色と同じ紫色。知性的な色で、学者という雰囲気を持った。黒かと思いきや、肩まである髪は見たこともないような灰色だった。なんというか、中年のおじさんのような黒と白が混じっているのではなく、もとから灰色なのだろう。なんにせよ、宰相という職業である。疲労で髪の色がだんだん薄くなるんじゃ……といらぬ心配をした私だった。

「君は、この娼館を支えたと聞いている」

随分と大げさな表現である。しかし身に覚えがないわけではないので、私は否定せずに苦笑する。

私が来たばかりの頃、近所に大きな娼館が集まるようになってたくさんの客を取られるようになったのだ。それは、とある宰相が（後でステンカだったことが判明するのだけど）遊郭は一部の地域にまとめるべきだという提案を出し、見事国王の許可を得て、中心街から北部地方は女将さんが持つ遊郭付近にまとめられたからだ。かなりのかわい子ちゃんが住まう娼館が次々と高くそびえ立ち、女将さんの娼館は、客が遠のくばかりだった。日に日に機嫌が悪くなる女将さんを見兼ね、私はとある方法を思い浮かんだ。『私の民族の衣装と、あだ名を作ってみたらどうだろう』と。ホストなどであだ名が使われていたのを思い出したのだ。ここは律儀にも自分の本名を言い合う。（偽名を名乗る人もいるけど。）ぜひ着物に合わせて、日本の名前を使ったらどうだろうかと提案した。

これはなかなかの評判だった。以前に比べ客は二倍、三倍と膨らみ、しまいには娼館の分館が二つできたほどである。「よいではないか」と言いながら帯び紐を外す遊びも導入され、人気となっている。発案者の私はびっくりする他に表情で表わせなかった。そういうわけで、今の娼館は私のおかげで成り立っていると言っても他言ではなかったりする。

でも、この娼館、『夜の桜』は女将さんへの恩返しなんだから。恩人には当たり前の行為だったと思ってる。

宰相殿は、また咳払いをした。

「そして数学の知識がある、と」

なんせ理系ですもん。微分・積分までの数学の知識なら受験で嫌というほど鍛えられている。

「……是非、君を宰相に推薦したい」

「はあ……はっ？！」

私は耳を疑った。

宰相に？？

誰がよ？！

「……『君』とはミッシェル、あなたのことだったのだが」

「ほら、きょろきょろしたってここにはアンタと宰相殿、そしてあたししかいないよ！」

女将さんに背中を強く叩かれ、呻いた。

やはり私のことらしい。周りにめぐらした視線を、今度はステンカに注視する。

「私、ブロツワル出身じゃありません。むしろどこの馬の骨かもわからないような、遠い東の国の出身なんですよ？　そんな私を宰相にしたら、色々と大変なのでは？」

色々とは、色々。日本だって、例えばアメリカ人が総理大臣だったら絶対反対する人はいるだろうし、かといって身近な韓国や中国にいたっても、そういうものだ。そんな制度が似たこの国に、私が宰相になっても大丈夫だという確信はない。被害と迷惑はご免蒙りたいのだけど。

「今は戦後で、猫の手も借りたい状況だ。有能な人材が欲しいのだ」

「数学ができるだけで特に得することはないと思うんですけど……」

機械を作るほどの頭があれば別の話だろうが、いかんせん、私は平凡な大学生の身である。

「構わない。とにかく、来い」

「ちょ、私の意思は無視ですか？！」

「国王からの命だと言われれば、従わなくてはいけないのが本当だろうに」

「うぐっ」

そうだ、ここは日本ではなくてブロツワル。国民主権の国じゃなくて、王制の国なんだ。

やるせなく言葉を失った私に、女将さんは優しく声をかけてくれた。

「ミッシェル、宰相に選ばれるのはとても名誉あることなんだよ。どうかあたしのためにも、みんなのためにも、この国をきっちりま

とめ上げてお行き」
「おかみさん……」
「大丈夫さ、向こうには麗しき国王がいらっしゃる。噂によれば前国王とはまかり違って、見ればあまりの美しさに気絶してしまうとのことだそうじゃないか。どんなものかちょいと見てやってきてくれよ、ミッシェル」
「……」

途端に石の如く固まってしまった私だったのだが、宰相殿は遠慮なく追随をかけた。

「決まりだな」
「あ、いや、ちょっとまっ……」
「後日、迎えに行く。それまでに伴う召使いを選ぶと良い。一人では不安だろうからな」
「え、あの、やっぱ無理やりは駄目かと……」
「では。失礼した」

宰相殿はそう言って、さっさと暖簾を押し避けてどこかへと行ってしまった。

命令だ。強制だ。
国王亡き今、実質ナンバーワンの宰相に逆らうことはできず、私は見事に宰相への大出世を果たしたのである。

だが、いざ王都に着いて問題が発覚した。
ステンカが私のことを男だと思っているということ。

私の身なりはショートボブに、ささやかすぎるまな板胸に、百七十センチをゆうに超える身長……など諸々。女らしい口調もなければ、振る舞いもこの世界からしてみればかなりガサツらしい。男と間違えられたと嘆く以前に、女らしいものが一切ないという悲しい事実に気が付いてしまった。

私が王都に行く際、付き人として選んだ召使い、リント＝ホーエルはステンカのことを「鈍感野郎！」と罵った。宰相のことをそんな風に言ってはいけないと止めるべきなのだろうが、いやはや私としては「モミ野郎！」と怒鳴りたいところだったのである。もちろん耳の前に垂らしたもみあげっぽい髪の毛が立派だからだ。そんなことをリントと盛り上がると、隣の馬車から盛大なくしゃみが聞こえた。どうせならいっそ、馬車ごとひっくり返ればよかったのに、と涙ながらに思ったのだった。

というわけでステンカに傷つけられた乙女心が癒えぬまま宰相としての仕事が始まったのだが、それはもうめぐるましい早さで仕事を済まさなければならなかった。ステンカが猫の手も借りたいと言っていたのは、なるほど的を射た発言だと思ったほどである。

まず最初の仕事は、とりあえず文字を覚えろ、とのことだった。

「書けなくてもいい、ただ読めるようにはしろ。でなければ話にならん。幸い、お前の召使いは元貴族で文字を扱える。付きっきりで覚えるんだ、二日で」

二日？！

咄嗟に反発したものの、ステンカの途轍もない睨みと、召使い呼ばわりされたリントの恨みにより降参してしまった。

ええ、やってやろうではありませんか！

ステンカの恐れにひるみ、私はリントに付きっきりで朝から晩まで勉強した。リントはリントでステンカを見返すためにただならぬ

目つきでいた。本気を出さなければ殺されてしまうのは、もちろん私だ。
二日目の晩、簡単な本の和訳ができて、やった！　とリントと喜んだ翌日の朝に仕事が大量に降ってきた。
あれほどステンカを恨もうと思ったことはない。

ブロツワル国は、大陸の南部に位置する。大陸の中部から南部は広大な砂漠が広がっており、ブロツワル国も例外なく砂漠の国だった。地球でいうところのサウジアラビアとか、エジプトの類だろう。ただ砂漠といっても全く雨が降らないというわけでもなく、水不足に悩んでいるというわけでもない。
世界の出来方が違うため悩みどころなのだが、要するに大陸の半分が砂漠になってしまったのは気候云々ではなく神話にあるらしい。とある大地神が島ほどしかなかった大陸を広げたいと考えて、二人の人間を創った後、海を全て埋め尽くしてしまう。それに怒った全てを治める全能の神が大陸のほとんどを砂漠にしてしまった、という話。一見、何て滅茶苦茶な話なんだと思ったが、一応神話なので口出すことは憚れた。この神話はギリシャ神話のアダムとかよりは、真実味があったのだ。
まず、海がない。一面青い水が広がっているのかと思いきや、湖だったり河だったりする。地球では海がなければ生命体の循環が成り立たないのだが、この世界はどうやら違うらしい。水がなければ死んでしまうという人間の本性は同じなのに、水から文明が生まれたという常識は同じではないというのだ。
地球の四大文明はいずこ、と嘆いても仕方ない。この世界は地球とは根本的にどこか違っているのだ。
その事実を知ったミッシェルは、『ブロツワル国と近隣国の歴史』という本をさし投げた。自分の常識という物差しが使えないのでは、

何を見ても納得できないと判断したのである。さて、常識が通じないのであればこの国の恥となるか……とミッシェルは懸念をしていたが、幸運にも他国との接触を図るような仕事は全くなかった。ステンカはミッシェルが全く異なる文化の国から来たのだと薄々気づいていたらしい。

こういうときにだけ働くステンカの『鋭い目』とやらは、どうやら日常生活はおろか、恋愛方面では全く働かない。

そして、私の方も大きなネジが外れてしまったのだろう。

私、ミッシェルこと三井依琉はステンカ＝ラクスエスに恋してしまうという、大変なことが起きてしまったのだ。

1．予想不可能なこと。（後書き）

初投稿です。
更新は多分遅くなると思いますが、気長に待っていただけたらと思います。

2．ハプニングなこと。

麗しき国王、ユリアヌス＝ラ＝ブロツワルが玉座に御座すブロツワル国。
今日もまた清々しい晴天の下で、王宮は変わりなく忙しい日常を過ごす――……はずだったのだが。

王宮の一室で、ステンカ＝ラクスエスは理性と闘っていた。

「ま、まさかミッシェルが……いや、今までそんな風には見えなかったが……」

うんたらかんたらと悩む姿は、ミッシェルから見ればさぞ痛快であろう。だが、その場にはブロツワルの宰相であるステンカと、その執事ラインハルト＝アリャンしかいない。
今まで書類と格闘することはあっても、ひとりでに唸る主人を見たことがなかったラインハルトは、とても怪しげに主人の方を見た。

「なにか拾い食いでもしましたか」

その心配の仕方もどうかと思われがちだが、ラインハルトの主人はやりかねないのだろう。

「薬をお持ちいたしましょうか」
「いや、いい。これは違うんだ」
「そうですか」

ラインハルトは深くは追求せずに、執事らしく部屋の隅で待機した。

だが、ステンカは悩むばかりで一向に書類に手をつけようとはしない。それに苛ついたラインハルトは、白けた目でステンカを見やった。
何を悩んでいるのか疑問に思うよりも、この執事は思い煩う主人を喧しいものだと判断したらしい。

「ステンカ様、まだ書類に手をつけていませんが」
「ああ……集中できないんだ」
「そうですか。では書類の一部をミッシェル様に回しましょう」

ミッシェル、の名前に反応したステンカに、ラインハルトはおや、と思った。

「い、いや、回さなくてもいい」
「ですが、このままですとステンカ様は徹夜の作業に入らなければなりません。もう既に開始から一時間二十三分経っています。普段であれば書類の三百枚は終えているはずですが、現状はたったの十五枚です。このままの早さでは一夜の徹夜どころか、一週間の徹夜がかかされることとなりますが」
「……お前が手伝うということはしないのだな」
「一介の執事ですので」

無闇に手伝うと、国の秘密機関まで触れることがある。そうなれば何処か分からぬ者に狙われ命の危険があるため、ラインハルトは書類をまとめるだけで、丁寧に片付けようとはしない。本音は、ただ命をさらしたくないだけなのだが。
そして執事の本音を知るステンカは、尚更唸った。

「わかった。予算の一部をミッシェルに回す」

人一倍プライドが高いステンカは、白旗を上げた。

宰相という職は、国をまとめる大事なものである。
ミッシェルは主にそれぞれの領地から送られた予算と国の予算を合わせ、不都合なものがないかを計算して調べるのがほとんどだ。言ってみれば簡単だが計算は全て暗算であるし、半分近く失ったとはいえ、領地の数は百を軽く超えるので計算は楽ではない。その上過去の情報を元に大きな変化がないかを調べ、天災があれば膨大な金を調節しなければならない。
ミッシェルは当初、この仕事をまともに仕上げることができずにステンカの助けを必要としていたが、今では余裕ができて、今まで貯めた給料を少しずつ崩してお洒落をしているらしい。
それを聞いたステンカは、なかなか減らない仕事の一部をミッシェルに送りつけた。国に贈られた嘆願状で許可を与えるものに判を押すという仕事だ。これも一見楽そうな仕事だが、嘆願状のほとんどは領主への苦情であり、百以上の領地ごとに書類を分けて判を押すのはなかなか苦しいものである。
それもミッシェルが慣れてしまえば、今度は政治の一部でも関わらせてやろうとステンカが思索していた、まさにその時。

事件は起こった。

前日の深夜。ステンカは大きな仕事を終えて一段落していた頃だった。
普段はそのまま疲れきって机に突っ伏して寝てしまうのだが、今回の仕事を終えた時は何故かそういう気もなれず、ふと見上げた月

が奇麗なのを思い出して、月でも見ながら風呂でも入ってしまおうかと考えていた。
　ステンカは寝起きが悪い。そのため、毎朝執事のラインハルトが用意してくれた風呂に入るのが日常だった。だが、運の悪いことに、このステンカの気まぐれな行動が事件を引き起こすことになる。
　ステンカは王宮の大浴場へと足を運んでいた。ステンカに充てられた部屋に風呂はあるのだが、不景気である今、国王と重要な客人以外は大浴場で汗を流すようにと命じている。命を出す際、ミッシェルは「水が勿体無いもんね！」と賛成してくれたが、水不足という概念がない世界なので、ステンカはその意味を理解しかねた。なんともおかしなことを言う奴だ、としか思わなかった。ただ単に、水を引くにはお金がかかる。水の量よりも、引く場所の数によって値段は比例するため、一か所なら節約できるだろうというステンカの案は、満場一致した。
　そういうわけで一介の宰相であるステンカも大浴場を使わなければならない。だが彼は低血圧という事情で、朝風呂のみ許された。ステンカが仕事を始めないと、王宮中に仕事が回らないのが現況だったりするのだが。

　大浴場は未明の時刻に水が抜かれ、陽が昇り始める頃にはまたお湯が溜まる。今は深夜であるため、まだ湯はあるだろう。久しぶりにじっくり湯に浸かって月を眺めようと、ステンカは着衣を脱ぎ捨て、真っ裸で大浴場へ足を踏み入れた。
　服を脱ぐ時、そこにミッシェルがいつも着る服があったので、ミッシェルもいるのだろうとステンカは思っていた。だが、この時ステンカはミッシェルのことを男だと思っていたので、明日の仕事の内容でも語り合おうかと考えていたのである。

　だが、浴場の扉を開け、しばらくの間の後、悲鳴が響き渡った。

「きゃあああああ、いやあああああっ！！」

浴場には案の定、ミッシェルがいた。

いたのだが、ステンカは最初、湯に浸かって顔を真っ赤にさせている人物がミッシェルだとは思わなかった。

胸があったかと聞かれるとあったかもしれないが、それよりも男には必ずあるはずのモノがなかったので女だとそこで判断した。

「……ん？　女？」

ミッシェルは男のはずだが、とステンカは頭をひねる。

ステンカは眼鏡を外しているため、とても視界が悪い。女であることが分かってからも、まさかミッシェルだとは思わずにその場で硬直していた。

大浴場は言わずもがな、混浴である。男と女が一斉に入らないように、時間を分けて入るように指示したのだが、深夜に入る者は誰もいないだろうとステンカは思っていたため、気楽に事を運んだのがいけなかったらしい。

そこで、女から背中越しに泣き声に近い声で叫ばれた。

「その下品なものを隠して！」

「あ、ああ。済まない」

ステンカは慌てて湯に浸かった。

「って何でこっちに入るの？！」

「……何か問題が？」

女が怒っている理由が分からなかった。

「着脱室に戻ればよかったでしょ！」
「ああ……」

女の言うことはご尤もだった。だが、今さらなので大人しく月でも見ようかと思っていた。
大浴場は広い。さすが王宮一の浴場だと感心する。浴場の上には換気をよくするために窓を設置している。湯を温める設備は浴場にあるため、換気は必須である。その窓から満月がよく映え、星が一つも見えないほど明るい。

「月が奇麗だな……」

湯加減も良く、隣に女がいることも忘れてぼそっと呟いた。
すると、女がいきなり立ち上がって浴場から出ようとする。が、女は勢いあまって転んでしまった。

「ぎゃふっ！」
「お、おい。大丈夫か？」

ステンカもつられて浴槽から出て、女を介抱する。
ここで言っておくが、ステンカは女に免疫がないというより、女が一体どういうものであるかよく把握していない。生物上の違いは理解しているが、女がどういった感情を抱くか分かっていないのである。
だから親切心で介抱したつもりでも、女からしてみればただのセクハラにしか過ぎない。

「ぎゃあああああ！　こっちに来るなあああ！」
「暴れるなって！　……あ」

ステンカは暴れる女の手を掴んで、押さえようとした。もうこの行動からしてヤバいのだが、無論本人には自覚がない。真っ裸の二人が色々と格闘している間に、ふとステンカの動きが止まった。

「お前……」

間近で見た女の顔は、泣き顔のミッシェルだった。

ステンカは急に動悸がするのを感じた。改めてミッシェルの体を見て、女であることを確認した後、こう呟いたのだった。

「……ミッシェル？」

ステンカは前日の事件を思い出し、項垂れた。

まさかミッシェルが女だとは思ってもみなかった。女であれば多少の限度というものを覚えるのだが、ステンカはミッシェルに遠慮なく仕事を突き付けてしまったことに後悔していた。

このときステンカの頭には、ミッシェルの体を見てしまったことへの弁明はないらしい。というより、ステンカは女の体に興味を持たないためか、ミッシェルの体を見ても何とも思っていなかった。

だが、ステンカといえども、男である。

男と女の肉体的な限界は知っていた。だがミッシェルを男だと思い込み、男でもハードな仕事を女であるミッシェルに持ち込んでしまったのだ。子供のころの「女は子供を産んでくれる神である！」という親の教育により、女からは一線を引いて接していた。この事情を召使いのリント＝ホーエルが聞けば「あれのどこが女神に対する口調よ！」と憤慨しかねないが、ステンカにとって女はまさに未知の領域であった。

今、ステンカはラインハルトに言われて持ってきた書類を持ち、ミッシェルの部屋の前でうろうろしていた。ミッシェルに合わせる顔がない、という考えは脳内にないらしい。
ただただ部屋の前でうろうろしていた。
それは傍から見れば、とても怪しかった。

「……ステンカ様、何をしているのですか」

偶然通りすがったミッシェルの侍女、リント＝ホーエルが見るに堪えず、つい声をかけた。

「ああ、ミッシェルの召使いか」
「侍・女・です！　で、ステンカ様はこんなところで何をしているのです？　そんなところで怪しい行動をしていると、ミッシェル様の醜聞になるので止めていただきたいのですけど」

ステンカの執事といい、侍女といい、ステンカを敬う気持ちはないらしい。今に始まったことではない（というか本人は気付いていない）ので、ステンカは気にせずにリントと向かい合った。

「ミッシェルに書類の一部を持ってきた」
「……ステンカ様、もしかしてまだ仕事に手をつけていないのではなくて？」
「何故分かる」
「ステンカ様。今日はお休みになられたらどうです？　ああ、でもそういう訳にはいきませんわね。ミッシェル様がお休みを取られたから」
「……なんだと？」

突然だが、ステンカの宰相としての仕事は、実に膨大である。
まず、当日の休みをとった者の確認をとる。王宮の下っ端からその上司までの数を確認してから、それぞれの上司に指示を仰ぐのである。王宮の大部分がリストラされたとはいえ、国王ユリアヌス様自ら有志を募られてからは王宮に勤める者はとても多い。
その確認を終えてから、本来の仕事である政務の仕事につく。これは国をより良いものにしていくために、民間や研究員が調査した情報をもとに改革を行う。だがこれには時間がかかるし、調査自体、いくら下っ端が有能だとしても一か月以上はかかる。ステンカがついて調査を行うのが理想的だが、人手不足のブロッワル国の宰相は、外務の仕事も担っていた。
要人が訪問する時は、政務の仕事は夜に回す。本来は宰相が付きっきりになることはなく国王一人で迎えるのだが、何せブロッワル国の王は十歳もみたない少年だ。外務はおろか、政務の仕事もすべて行うことはできない。だからこそステンカの仕事の量はその他諸々の雑用も抱え、半端ないほど多いのだった。

そして、今日のステンカは一つ目の仕事である、休みの者をたった十五人しか確認していない。あと数十枚ある中に、ミッシェルの書類があるらしい。

「何故、こんな忙しいときに！」

休んでしまったのか、と言いかけた時、リントから凄みのある視線に気づいた。

「あら。ミッシェルを精神的に追い込んだのはステンカ様、あなたのせいではありませんか。ミッシェルから昨日の件、聞きましたわ」

リントから黒いオーラが漂うのに気がついて、ステンカは思わず

後ずさりした。目が怖かった。

「聞いたのか」

「聞きましたとも！　ステンカ様がミッシェル様のことを男だと勘違いしている時は腹立たしいとは思いましたけど、まさか女性の体を見てしまったなんて！　私であれば軽蔑いたしますわ！」

「も、申し訳な」

「謝罪なんて聞きたくありません！　第一それは私ではなくてミッシェル様に言うべき言葉でしょう！」

女は神である、と言ったのは誰だったか。ステンカに迫るリントを見れば、神を通り越して鬼のようである。

今にでも襲いかかってきそうなリントだったが、騒ぎに駆け付けたラインハルトによって押さえられた。

「落ち付きなさい、リント」

「いいえ、ラインハルト！　憎きこの男には一度制裁を与えなければなりません！　ラインハルトも、前に一度仰っていたじゃない！」

「そうだが、人目の付くこの場では私たちの立場が危うくなる。ステンカ様は仮にも宰相だ。とりあえずステンカ様の執務室に行こう。制裁はそれからだ」

どうもこの二人は本当に上司を敬う気持ちがないようだった。

2．ハプニングなこと。（後書き）

改変：改行を増やしてみました。
誤字直しました。報告ありがとうございました！

3．一目惚れなこと。

私がステンカのことを好きだと気がついたのは、いつだっただろうか。
少なくとも、最近ではない。
あれは、私が宰相となって間もない頃だった。

「ここがフィーデリンデルの領地。これはフィードロダウル。で、これがフィルーダーラよ」
「なんでこんなに名前が似ているのさ！　しかもこれらの領地って同じランカル地方で隣同士だし！」

私は読み上げた領地の名が記されている書類を投げた。
本日の仕事も終わって、侍女のリントに領地を覚えるのを手伝ってもらっていた。
リントは元貴族で、それなりに教養があった。ではどうして貴族のリントが娼館にいたのかというと、このブロツワル国の爵位をもっていた両親が事故で亡くなり、リントに引き継がれるはずの権力や財産が全て叔父に回ってしまったらしい。そして叔父はリントを嫌っていたらしく、なんとリントを路上に捨てたのだとか。リントは、「奴隷売買の奴らに渡されなかっただけマシでしたわ」なんて言うけれど、路上で一人きりになるだけでも相当に恐かったのだろう。そのあと、女将さんがリントを見つけて庇護することになった。
私が侍女としてリントを選んだのは、そのためでもあった。貴族だったリントなら王宮の仕事を軽くこなせるだろうし、何よりリン

トが娼館に慣れていないのは傍から見ても分かっていた。私はそう判断してリントを選んだのだけど、リントにとっては何故か光栄に思ったらしく、「これからは一生ミッシェル様に仕えていきます！」と大げさに宣言したのだった。そして今に至る。

リントは本棚から一冊の本を抜き取り、私に渡してくれた。
表紙に一人の女性が描かれてあった。水色の長い髪を垂らし、川の中で魚と戯れている。その女性の足は、踵から魚のヒレが付いていた。少し違うけれど、人魚と同じなのだろう。

「名前が似ているのは『フィリーダ』という神を信仰しているからなの。ここ辺りは奇麗な川が流れていて、水の神である『フィリーダ』が恋人を探すために、ランカル地方一帯の川を泳ぎまわるの。その女神に一目ぼれしたランカル地方の領主が『フィリーダ』という名前をとって名乗ったのがはじまりよ」
「じゃあ『フィリーダ』の名前をとった領地が三つあるのは？」
「三つの領主どもが女神に惚れたからでしょうね」
「へえ……」

お偉いさんを骨抜きにしてしまうとは、さすが女神だ。しかし妙に感心してしまった。
私は三つの領地の名前が書かれたカードを地理的に並べ、そこに書かれていた文字を数回音読した。ついでにその領地に関する情報をしっかりと覚えているものだけリントに問うてみる。
このとき、ミッシェルはステンカから宿題を出されていた。領地を全て覚えてしまえ、というもの。領地だけならまだともかく、領主の名前、家族構成、主な歴史まで覚えろと言う。日本の天皇を推古天皇あたりから昭和天皇までの名前を全て覚えるよりも難しいと思う。漢字よりもカタカナのほうが当然覚えにくい。それも、仕事の合間に、だ。

だが、無機質に覚えず、リントから理由も聞きながらなので苦痛というほどではない。それにステンカは今の私よりも忙しいと聞くし。どれだけ有能なんだろう、あの人は。

「そういえばフィーデリンデル領主夫人は確か、フィリーダ様だったね」

「フィリーダ＝ラ＝フィーデリンデル様ね。そういう名前はランカル地方で珍しくないの。今では庶民から貴族まで使われている名前だから」

「ほほー」

リントは教えることが上手だ。リントが男の教授だったら絶対に惚れるな、と感心しながら聞いていた時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ミッシェル、頼みがあるんだが……」

ドアの合間から現れたのはボサボサ髪のステンカだった。だが、そのステンカに違和感を覚える。顔の一部分が、何かが足りない。

「眼鏡を失くした。探してくれないか？」

「はあ？」

「見えないんだ。ラインハルトは昼から外回りに行ってしまって居ないから」

ようするに、私に探してほしい、と。

相も変わらず人使いの悪い宰相である。普通の人なら発狂してもおかしくない仕事の量をこなされ、宿題も出された。その上に探し物をせよとは。極限にまで眉をひそめたリントを見つつ、渋々私は勉強をいったん中止してステンカの眼鏡を捜すことにした。

ステンカの顔は前髪に隠れてよく見えないが、前髪の隙間から目を細めていることはわかる。目が悪い人がよくやる動作だ。ステンカも眼鏡を取ってしまえば、私の元の世界の友人と同じようなことをすることが可笑しくて、私は吹き出した。

「何が可笑しい」

「いいえ、一国の宰相も平民じみた事をするんだなあって」

「当たり前だ。私は平民出身だからな」

私はビックリしてステンカを見た。ステンカが平民だったことに驚いたからだ。そういえば、ステンカ＝ラクスエスに、貴族特徴のミドルネームが存在しない。ミドルネームといっても、ささやかに『ラ』の一文字が入るだけなのだが、貴族はこれを誇って必ず名乗るようにする。何せ国を握るブロツワル国王も同じ『ラ』のミドルネームが入っているからだ。確か、『ラ』を表記して違う読み方（この世界には音読み、訓読みのように二種類の読み方がある）をすると『尊厳・崇高』みたいな意味があった。それも理由のうちの一つだろう。

だが私が驚いたというのは、厳密にはステンカが平民だったことではなく、平民であるステンカが宰相になれたことだ。

知っての通り、ブロツワル国の前国王は無能だった。

それを囲うようにして貪欲な貴族たちが存在していた。娼館に訪れた旅人の誰かが、ある種の暗黒時代だとぼやいていたのを思い出す。平民を見下し、税をたくさん課して、貴族である自分たちは贅沢に暮らしていた時代。そんな時期に、誰が宰相の座に平民が就けると思うのか。いや、誰も思わない。

だけど、現実にこの男はなってしまったのだ。

「……」

「なんだその目は」

「目が悪いのに案外鋭いんですね」
「気配でわかる」
「そうですか。じゃあ私の言いたいことも分かるのでは？」
ステンカのごっつい黒縁の眼鏡を捜しながら、肩を並べて歩く。
ステンカはため息をついた。半ば呆れているらしい。
「平民が何故宰相になったかは、誰も真相を知る者はいない」
どういうこと？　ステンカは宰相になったんでしょ？
私の視線を受け、ステンカは面倒臭そうにボサボサ頭を掻いた。
白いフケがパラパラと床に落ちる。
「私が宰相となれたのは、前宰相殿の推薦があってのことだ。だが、彼は前国王を操った貴族の一人であり、平民たちをのし続けた。あの過酷な政治を行った貴族の一人でもある。そんな彼がただの平民である私に目をつけ、宰相にさせた真意は私にも解せない。無論、他人にもだ」
なかなか、捻くれた宰相だったらしい。少なくとも、私にはそう感じる。
「今、その方は？」
「戦火に巻き込まれたと聞く。前国王と同じく天罰に遭ってしまわれたのだろう」
「……悲しまれないんですか？」
あっさりとした口調。出世できたのはその人のおかげなのに、悲しくはないのだろうか。

「喪は既に明けている。いつまでもその感情を引きずっていくわけにはいかない」

仮にも宰相の身だからな、とステンカは続ける。

「そもそも、恩師と抱くような感情はなかった。宰相になりたくてなったわけではないのだ」

軽蔑するような、そんな笑み。ステンカは恩を感じていないのだろうか。

前の宰相が悪かったと思っているのか。それとも……。

「その人、きっとこの国を助けたかったんじゃないかな」

「何？」

「きっと素直な人じゃなかったんだよ。だからちゃんと国をまとめてくれるステンカに、望みをかけた」

貴族だからといって宰相として立派に仕事をしていたら、他の貴族に弾き出される。だからこそダメな宰相を演じつつ他の人に頼るしかなかった。自分の取りたい行動さえ分からなければ、変な人、で済ませるだろうから。そして律儀に仕事をこなすステンカを守るために自分は汚い仕事をしたのだろう。王宮に詳しくはないが、宰相の身となって国に仕えるようになってから、貴族社会でひしひしと感じた事情。ドロドロで嫌なものが巣食っていた裏に、奇麗で素直な一面もあった。貴族社会は猫をかぶって生きている社会。それはどこの世も一緒なんだなぁと私が感じた部分でもあった。

だからこそ、前宰相のその人を表だけで判断するのはどうかと思ったのだ。

あくまでも想像でしかないけど。

「私は、そう思うな」

だから、ステンカにその人を恨んでほしくなかった。

この国を治めている人なんだし、私が不本意とはいえども出世できたのも宰相だったステンカのおかげだから。

ステンカを宰相にさせたその人には、少なくとも私は感謝している。

「そうか」

そう言ってステンカは前髪をあげながら微笑んだ。

その瞬間、体に電流が走った。

意外にも、眼鏡をはずしたステンカは美形だった。モデル並みに、いやそれよりも格好良い。

ビン底眼鏡のせいで小さく、さらに前髪に隠れてしまった紫色の目が、とても印象的だった。よく見ると、灰色の睫毛はロウソクの灯に照らされて銀色に輝き、その中心である紫の瞳は何とも神秘的だった。

きれい、なんてものじゃない。

言葉に表せないほど、あの時私は感動してしまった。

断言しよう。

このとき、私ことミッシェルはあの紫色の瞳に惚れてしまった。

「うわあぁぁあああ……」

あの事件があった翌日の朝早く。

私は悶絶していた。

「ミッシェル様？」

深夜の出来事など知る由もないリントが心配そうに私を見上げる。

このとき、午前四時。

あの事件があってから三時間。私は一睡もしていなかった。

ミッシェルは、あの事件の夜、お風呂に入っていた。

ステンカが提案した『浴場一括採択』によって入る時間が決められた。朝は基本的に自由なのだが、仕事が始まる時間でもあるため、使う者は数えられるほどしかいないだろう。昼からは仕事を終える順番に、女・男と十五分の間をあけて一時間ほど使用するように言い渡された。

だが、宰相の身である私の場合は別だった。大臣などの貴族でお偉い人は「こんな下賤な者（召使とか）が入る浴場に誰が入るか！」などと言って王宮近くにかまえている自宅や別荘に帰って満足しているらしい。もちろん、その水代は抜かりなく貴族自らが出すように指示している。私の場合、そんな家も高い水代もあるはずがなく、かといって仕事真っ最中の昼に入ることはできない。

それを配慮したステンカや、麗しき国王のユリアヌス様が深夜に

入ることを特別に許されたのだ。
深夜であれば、朝の早い王宮で働く人たちはぐっすり寝ている。受験戦争で鍛えられた徹夜漬けのおかげで、私は睡眠時間が少なくても平気になっていたので、その提案を受け入れたのだった。
そういう過程で私は毎夜、この時間に浴場を独り占めにしていたのだが……。

この日は、違った。

私は一通り体を洗い終えた後、ゆっくりと湯船につかって、そろそろ出るかと思った頃に、それはやってきた。
ガラガラッ。

「えっ？」

突然浴場の扉が開かれたので、私はびっくりした。それもそうだろう、かれこれ一年以上誰も来ることなんかなかったんだから。
そして現れた人物を見てそれが私の想い人であることを知ると、私はしばらくの間、文字通り固まってしまった。

「きゃあああああ、いやあああああっ！！」

そこには、何故かステンカがいた。
何故ここにステンカがいるのか。私は必死に考えを巡らせる。
ステンカは、そう、私と同じように特別に風呂は別だったはずだ。朝が苦手で、朝風呂をしないと目が覚めないとかなんとか言っていたのを思い出す。おまえは悩める女子高生か、と心の中で突っ込んだ記憶があるから、確かだ。（別に女子高生に限ったわけではないが。）
だから、ステンカは本来、ここにいるはずはなくて。

私、ちゃんと服脱いでいたよね？　着脱室で服を置いたはずなんだけど？

宰相の二人に充てられた服装は黒のローブに銀の羽根のブローチだ。服装で職業が分かるため、もちろんお風呂に入っている人が誰なのかもわかるはず。

そう思った私だったが、そこであることを思い出す。

そういえば、ステンカは私のことを男だと勘違いしたままだ。男同士ならば平気なのだと思ったのだろう。

今になって訂正しなかった自分を恨んだが、もう後の祭りである。こうなれば、隠し通すしかない。

私は今湯船の中で立っていることに気がついて、慌てて大きな音をたてて中に浸かった。不幸中の幸いというべきか、湯は白で張られている。

「……ん？　女？」

ステンカの疑問の声が、浴場で反響した。

私は、とにかく焦った。隠し通すと決めた瞬間からばれるとは、なんとついていないのか！

冷汗をだらだらと流して、事が終えるまで待ってみる。が、何故かステンカはそのまま突っ立ったまま動こうとはせず、その場で何かを考えていた。

当然、湯気が立っているとはいえある方向へ目が行く自分を叱咤しつつステンカに叫んだ。

「その下品なものを隠して！」

「あ、ああ。済まない」

ステンカは慌てて湯に浸かった。私はもちろん、びっくりした。着脱室に戻ると思いきや、こっちにきて挙句の果てには湯船に浸か

ってしまったのだから！

「って何でこっちに入るの？！」

「……何か問題が？」

「着脱室に戻ればよかったでしょ！」

「ああ……」

ステンカは納得したように頷いたが、ここから動く気配はない。どうやら一旦入ってしまえば一件落着したものだと思っているらしい。冗談じゃない！　と私は憤慨したが、どうすることもできなくてそのまま湯に浸かることにした。

ああ、どうしよう。ステンカは私が女だってことに気がついたのかな？　でもそんな素振りは見えなかったし……少なくとも、ここにいるのが女だってことは気が付いているよね。意を酌んで（いるのかはともかく）湯に浸かってくれたのだし。だとしたら私がミッシェルだってことに気が付いていないのかな？　……うん、たぶん、そうだ。

私は嬉しいような悲しいような、微妙な気分になった。

なんで好きな人には女だとばれないように必死になっているんだろう。でも、私は変化をとにかく嫌う。女だとばれてしまえば、当然ステンカの態度は変わるだろう。女嫌いとは言わないが、女とはあまり接する所を見たことがない。そのおかげで嫉妬の感情を抱くことはなかったが、その分、私が女だとわかった時が一番怖いのだ。

今のままでも十分幸せ。傍にいて、同じ仕事をしていると思えば、小さな幸福を得られるのだから。

それ故に、ばれるのを一段と恐れる私だった。

私は音をたてないように、ステンカから離れ、そっと湯船から出ようとした。

だが、ここでステンカが丸く空いた窓を見ながらこう呟いたのだ。

「月が奇麗だな……」

はっとしてステンカをみると、その横顔は、あの時私が惚れたステンカの顔と一緒だった。ゆるく唇は弧を描き、月と反射する湯の月に照らされ、ステンカがあのとき以上に輝いて見えた。髪や顔を洗うためか、前髪も上げてしまって神秘的な紫色の瞳が月を写す。

ただでさえ長く浸かっていて熱いのに、さらに顔が熱くなるのを感じた。

だめだ！　こんなところに長くいたら逆上せてしまう！

私は慌てて立ちあがって、浴場を出ようとした。だが、濡れた床によって見事にお尻から転んでしまった。

「ぎゃふっ！」

「お、おい。大丈夫か？」

びっくりして振り返ってみると、ステンカもつられて浴槽から出て、こっちに来ようとしている。

ええええええ？！　冗談じゃないよ！　なんでこっちに来るの？！

「ぎゃあああああ！　こっちに来るなあああ！」

「おい、暴れるな！」

ステンカが伸ばした手を払おうとしたが、逆にその手を掴まれて抑え込まれた。尻から転んでしまったのだから、もちろん仰向けに。うつ伏せならまだ冷静になれる余地はあるのだろうが、胸をさらけ出すこの格好は、とにかくヤバい。バスタオルじゃなくても、何か持っておくべきだったと後悔した。

貞操のピンチ？！　と私が思う間もなく、がっちりとそのままの格好でステンカと目が合う。

「お前……」

あ、やばい、泣きそう。

こんなことをされても、私の体をまじまじと眺めるステンカの紫の瞳を見たら、ああ好きなんだなあと思ってしまったのだ。

そんな自分に幻滅して、涙腺は壊れかけていた。

「……ミッシェル？」

ああ、もう最悪。

それから私は一睡もできるはずもなく、布団の中で泣いて一晩を明かした。

毎朝早くに起床するリントに、腫らした目を隠せず、事情を聞かれたので説明した。

案の定、リントは怒り心頭に発した。

「あんの小僧めぇぇぇぇぇぇッ！」

小僧とは言うが、ステンカはれっきとした成人である。それこそリントや私よりも年上のはずなのだが、女に対しては小僧もガキんちょも同じだというので、そのまま言わせることにしている。

「こうなったらミッシェル様、ストライキをおこしましょう！」

「えっでも仕事をやらなきゃやばいんじゃないの？」

「大丈夫ですわ。仕事はステンカ様とラインハルト二人でどうにかなります。元はあの二人がこなしていたのですから。それが元に戻

ったからといってとやかく言うべき者はおりません」
「で、でもストライキは……ちょっと」
日本人の勤勉な精神が揺らぐ。
「でしたら、有給休暇をとればよろしいのですわ。ミッシェル様は少し働きすぎですから、休みを取るのもいいでしょう。王宮に仕える者の全ては、一年に十日の休暇が取れますの。宰相でしたら五日足して十五日。ミッシェル様は二年間働き詰めでしたから、ちょうど一ヶ月間の有給休暇がございますわ」
暗に有給休暇を取れ、とリントの裏の声が聞こえる。
というか、有給なんてあったんだ。ステンカのことだろうから私には知らせないようにしたんだろうなぁ。そう思うと、少し気持ちがへこんだ。
「休んだら、ステンカが大変になるんでしょ……？」
「そのための有給休暇ではありませんか！　あの男を懲らしめるのです！」
リントの本音が出た。こうとなったリントを止めれるはずもなく、私は慄いて後ろずさる。
この王宮で一番微笑ましいのは何かと聞かれると、ユリアヌス様のかわいらしい笑顔だと断言できるが、同じぐらい恐ろしいものはリントのステンカに対する怒りだと思うのは、私だけなんだろうか。
「それにミッシェル様！　もっと怒っていいのですよ、あの腐れ宰相に」
「腐れ……」
「女の体を不躾に見たのですよ！」

「……」
「それをあの男は謝りもしなかったんですよ！」
リントに奮われ、私はだんだん腹が立ってきた。
そうだ、ステンカは私の好きな人であれ、勝手に体を見たのだ。
女であるとわかっていたにもかからず！
「許すまじ、モミ野郎！」
こうして私はユリアヌス様が国王となって初めての有給休暇という名のストライキを起こしたのだった。

4．麗しき国王（前書き）

”～なこと”のつながりが思い浮かばない……！

4．麗しき国王

ブロツワル国王、ユリアヌス様は今年で御年七才になられる。王宮の中での唯一の癒しともいえるほど、その美貌は惚れ惚れとするものである。

どうやらユリアヌス様を見たことがない人にとっては噂で『麗しの』と喩えるのだが、美しいものに目がない女官たちや私は『可愛らしい』と喩えている。いや、喩えるまでもなく、本当に可愛らしいのだ。

「うーん……」

ストライキ決起を決めた私は、どこに行こうか迷っていた。せっかくの有給も目的がなければ楽しみがない。それにさっきからステンカのことばかりが頭をめぐり、考えがまとまらずに今に至るのだ。

ステンカのモミ馬鹿野郎！

心の中で喝を入れたところで、後ろから声掛けられた。

「ミッシェル、どうしたのだ？」

「ゆ、ユーリですか」

ユリアヌス＝ラ＝ブロツワル様のおなーりー。

私はユリアヌス様のことを『ユーリ』呼ばせてもらっている。最初はそういうわけにはいかないと拒否しておいたのだが、本人からの希望（というかあれは命令でもあった）により、呼ぶ羽目になったのだ。

「リントから聞いたぞ。これから一か月間会えなくなるのだな……」
と、ユーリは顔を伏せ、いきなり泣き出した。
「ユ、ユーリ?！」
「嫌だ！　ミッシェルに会うのが余の楽しみなのに、一か月も会えなくなるなんて、余は嫌だぞ！」
私は嬉しさのあまり、ユーリに抱きついた。
ああ！　なんて健気なんだろう！
どこぞの小僧とは全く違うわね、というリントが言いそうな言葉が頭に浮かんだが、必死でそれを打ち消した。
「大丈夫よ、ユーリ。永遠に会えなくなるわけじゃないんですから、ほら、一か月なんてあっという間ですよ！　すぐに帰ってきますから」
「ミッシェルはステンカに一か月も会えなくなるというのに、それに耐えられるのか？」
「うっ」
ユーリは国王だから為せるのか、とても鋭い。
ユーリはステンカと違って私を一目で女だと見抜き、私がステンカに恋した次の日に「ステンカが好きなのか？」と聞いてきたほどだ。だから私がステンカのことが好きだということは、不本意なのだが国王に認知済みなのである。
「それに、ミッシェル。今日は何かおかしいぞ」
ああ！　その鋭い観察力をぜひあのモミ野郎へ！！
と言うわけにもいかず、空笑いで逃れようと試みる。

「そ、そうでもないですよ？」
「私に嘘は通じないぞ、ミッシェル」
図星。棒読みだったら、観察力の良いユーリならわかるか。ステンカだったらこの場を凌げたのに、相手が悪すぎた。
「ミッシェル！」
ユーリは私の両手を強く握りしめ、あらぬ方向へ泳いでいた私の目がユーリの目と合ったと思ったら、すかさず追求してきた。
「原因を言え！　余が直々に排斥してやる！　だからミッシェルはストライキをやめるのだ！」
えぇぇぇぇ？！　なんでストライキまでバレてるの？！
私は泣きそうになった。もはや泣きたい理由もわからなくなる。鋭すぎるのも嫌なモノである。浮気とかしたらすぐにバレるんだろうなあ。あ、浮気なんかしないけど！
とりあえず、安穏な有給旅行を過ごすには、この麗しの国王を説得しなければならないらしい。
なんというハードミッション。
「ユーリ、とりあえず私はもう休暇届け出してきましたから。これはもう決定事項なんです。オーケー？」
このとき、ステンカが悶絶して休暇届けすら目にしていないことなど私には知ることはなく、当然のように王宮では日常を過ごしているものと思っていた。
ユーリは口を噤み、私を睨んでいる。

うううううう、なんか怖い、いつものユーリじゃない！

「ならば、私も行く」

ぼそりとユーリがつぶやく。

「は？」

「余もミッシェルとともに行く！」

ユーリのとんでもない発想に、私は実際にずっこけた。

「いや、確か明日、午前中に隣国の国王が見えるんじゃありませんでしたっけ」

「ステンカに任せればよい」

「……」

さすがにステンカのことが心配になってきた。私の仕事＋ユーリの不在が重なれば、当然ステンカもぎゃふんと言いかねない。私が勤める前はそれで仕事をこなしていたとはいうが、過去と現在では書類の量も異なるし、大臣も今は有能とはいえ不足しているのだ。

それが目的でもあったのだが、さすがにステンカのことを不憫だと思うようになってきた。

「それにミッシェルを悲しませるといえばステンカしか居らぬ。天罰であろう」

不機嫌な表情のままユーリはそう断言した。

本当に、天と地の差だ。ユーリはステンカの鋭いところを吸収してしまったのだろうか。聡すぎて逆にコワイ。本当に未来の王妃様が可哀想になってきた。あ、いや、ここは王様だけ多妻一夫制だか

ら王妃様一人だけとは限らないのか。ユーリが独占欲の強い国王になったらそれはそれで一騒動が起きそうなのだが、今はそこまで考えないことにする。
こうして、ちょっとしたストライキのはずが、小さな国王を巻き込んでしまうほどの出来事になってしまうのだった。

「いいですか、ユーリ。あなたはこれから私の従弟ということにします」
「従弟？　姉弟のほうが都合よいのではないか？」
「顔立ちから何もかも違うので、むしろ他人と言った方が良かったりしますが」
「……」
「ああ、いえ！　姉弟にしましょう！　そうですね、義理の姉弟であれば顔なんか似てなくて当たり前ですもんね！」

この小さな国王の無言のプレッシャーに負け、私は折れたのだった。
ユーリはよく私と同じことをしようとする。私がパンじゃなくて麺類を食べている時はユーリも麺類を食べるというし、城下町に一緒に買い物へ行ったときはお揃いのものをいくつも買ってくるし、お風呂の件も私と一緒に深夜へ入りたいと言い出した（さすがにこれは止めてもらった）。
あれだ、年の近い姉妹がいたとして、妹がクマのぬいぐるみを持っていたら姉もあれが欲しいと強請るようなものだ。しかしユーリは、強請った後クマのぬいぐるみに飽きるような、よくある姉の話のようなことはなく、私とお揃いだといった装飾品のほとんどを身につけている。
もちろん、一ヶ月間旅に出るこの日も例外ではなかった。

「ユーリ、その首飾り、外してきませんか？」

ユーリの首下できらきらと輝くネックレスを見て、私は一つ忠告することにした。もちろんそのお揃いのネックレスは王宮に置いてきた。

「何故？」

「国王が代替わりして二年が経ち、治安が良くなったとはいえ、国はまだ経済面で立て直しができていません。城下町ではそう多くありませんが、一歩王都から出ると盗賊が横行しているようです。実は私もその実情を探りたいなと思って、馬車を頼まずに徒歩で行こうとしたのですが」

今、気がついたのだけど。国王様を馬車じゃなくて歩かせるって許されることなのだろうか？　実行した暁には、大臣とステンカに殺されかねないような気がするのは私だけだろうか。

「余のことは気にせずともよい。ミッシェルがそうすると決めたのであれば、余もそれに従おう。だが、ミッシェル」

「は、はい」

ユーリの目が怖い。あ、今目の奥が光ったよ！

「ストライキだというのに、これではまるで仕事をしているみたいではないか」

「あー、これはもう身に付いた考えといいますか。前から気になっていたんですよ。でも仮にも宰相の一人がそう易々と王都から出ることは許されなかったので、今回チャンスだと思って」

「つまりは仕事なのだな？」

ぎろり、とユーリの目が私を睨みつけてきた。うう、なんで整った人の怒った顔ってこんなに怖いのよう。ヘビに睨まれたカエル状態な私はカクカクと首を縦に振った。

「そ、そういうことになります」

「……浮かれておった余が馬鹿であった」

ぼそりと私には聞こえない声でユーリが呟いて、しゅんとうなだれた。まるで仔犬が耳を垂らしているかのようだ。

ええ、正直に言いましょう。

か・わ・い・す・ぎ・る……！

抱きしめたい衝動に駆られたが、そもそもそのような顔をさせた原因は自分にあるので、萌え萌えな自分の感情を心の奥に留めておくことにした。

「でも、ユーリ」

「うん？」

「仕事の一環とはいえ、二人旅ですよ。ワクワクしませんか？」

ユーリの喜ぶ点は把握している。とりあえず私が絡むと嬉しいらしい。

要するに、モノの捉えようってことだ。

現にユーリは目をキラキラ輝かせている。まるで餌を待っているかのような仔犬の絵が頭に思い浮かぶ。

ああ、駄目だ。我慢できない。

すぐさま私はユーリを抱きしめ、萌えを爆発させた。もちろん頭の中で。自重という言葉はこうやって覚えていくものなのだよ！

まあ頭ではわかっていても体が伴うわけでもなく、私は両手で顔を隠して道路の真ん中で悶えていた。

私の行く先は、二年前までお世話になっていた娼館である。
ユーリを連れていくのに多少の抵抗はあったが、少なくとも私が知る地域の中では治安が良いほうだ。昼に行けば開いている娼館も少ないし、ユーリはもうそういう勉強をなされたというので、連れて行っても大丈夫だろうと判断した。
しかしそこに行くまでには歩いて三日。
男とはいえ、ユーリの足に合わせるとそれより遅くなるのは火を見るより明らかだったので、夜のうちは馬車を頼み、野宿も避けた。そして二日後に何のトラブルもなく、目的としていた娼館に着いた。

「ここが、ミッシェルが二年前まで暮らしていたところなのだな……」

ユーリは立派になった娼館『夜の桜』を見上げ、嘆息していた。
さて、どうするか。
女将さんには有給が決まっていた時に手紙を出してしまったので、ユーリが来るということは知らない。二年ぶりに私が帰郷するのだと信じているだろうが、まさか噂していた麗しの国王と共に帰ってくるとは思いもしないだろう。このまま店に入れてしまったらどうなるのか見当もつかない。
だからといって用意していた（使うこともなかった）義弟設定は使えない。何せ女将さんは私の事情を唯一理解している人間なのだから。まさか異世界の人間だとは思わないだろうが、遠くの国の人と思われているらしい。この国の人の顔は彫りが深いし、黒髪は見たこともない。そんな私とこの国の象徴であるユーリと姉弟である

とは、義理であるにしても信じがたいだろう。
他に何かいい関係がないものか……。
云々悩んでいると、店が開店したらしく、一人の娼妓が現れた。
「あら、ミッシェルじゃない。早かったわね」
襟の開いた胸元に、膝の上まで広げた薔薇模様の着物。瑞々しい肌に金粉を塗りこませた彼女は、右手にキセルを持ち、豊満な胸を覗かせながら客寄せをする。
彼女こそ、私を一年間保護してくれた恩人、女将さんだ。
「ただいま、女将さん」
「歩いてくるというから、明日ご馳走にしてやろうと思っていたのに、計算が狂っちまったじゃないか」
「ごめんなさい、ちょっと色々あって……」
「おや、そちの坊やはなんだい？　随分と可愛らしいじゃあないか」
可愛いものに目がない女将さんは、私の制止の声も聞かずユーリに顔を近づけた。
だが、すぐに後ずさりし、唇を戦慄かせている。え、なにその反応？
「この方、ブロツワル国王じゃないか！　ミ、ミッシェル！　どういうことなんだい？！」
どうやら悩んでいた時間は無駄だったらしい。無念。
「好きな奴に女だってばれたぁ？」

かぽーん、という擬音語が似合うほど大口を開けたまま女将さんは放心していた。
娼館『夜の桜』のとある一室。
煌びやかな廊下で客を招いている娼妓たちを尻目に、暖簾で区切られた勘定部屋に私たちは居た。彼らからはこの部屋は覗けないし、娼妓たちもそうそう来ることのない部屋だ。
女将さんもこの部屋では客寄せのためのポーズは止めている。
「……女だとばれたら家出するのかい？　そもそも、あんた女だったんじゃないのかい？」
大雑把に説明したらそうなりますよねー。
女将さんは私の後ろにぴっとり付いているユーリを一瞥して、ため息をつく。キセルの残り香がぷん、とした。
「そのあたりの事情は明日聞くとして、ミッシェルの目的は手紙でわかってるからね。あたしたちは仕事があるし、そのせいで夜はぐっすり眠れないかもしれないが、二階の一番奥の部屋をお使い。ちょうどベッドも二つあるし、ブロッワル国王も不満を言うような部屋じゃないさ」
「ありがとう、女将さん」
「ま、これくらいどうってことないさ。麗しき国王を拝めたんだしねえ」
「ほら、ユーリも」
後ろで恥ずかしそうに周りを見渡していたユーリが慌てて謝礼を述べた。
「これからお世話になります」

女将さんがガラにもなく顔を赤くしたり、何かを我慢しているような顔つきになったりして、まさに百面相している。さっきの自分の顔もこんな顔をしていたのかと思うと、かなり恥ずかしい。

しかし、人見知りでもなかったはずなのにこのユーリの反応は……まさか。

やっぱり娼館はユーリにとって刺激が強かったかな？

ステンカにばれたら殺されるな、と本気で思案する私だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2130q/

ラスト・ミッシェル

2011年6月10日12時15分発行